

# 「誕生日」祝いイベント

## バルーンやボード、対談も

茅野市で出土した土偶「縄文のビーナス」が国宝に指定されて30周年となる6月15日、その「誕生日」を祝おうと、同市尖石縄文考古館で記念イベントが始まった。来館者は大型の土偶バルーンと記念撮影したり、お祝いの言葉をメッセージボードに貼ったりして、縄文遺物の国宝指定第1号の誕生を改めて喜び合った。記念イベントは29日まで。(前田智威)



国宝土偶の大型バルーンと記念撮影する来館者

メッセージボードには「よくぞ出土していただきました」「縄文が好きになるきっかけでした」「80円切手の縄文のビーナスは宝物です」と縄文ファンからの熱のこもった言葉がイラストも交えて寄せられた。縄文のビーナスが安産を祈願し



縄文のビーナスの発掘と国宝指定に関わった原田さんと守矢さんの対談

でオリジナルのしおりと缶バッジもプレゼントしている。初日には、国宝指定に深く関わった元文化庁主任文化財調査官の原田昌幸さんと、縄文のビーナスを発見した同館特別館長の守矢昌文さんの対談も開催。発見までの経緯やその後の国宝指定、欧米でも繰り返し展示されて世界的に関心を集めた経緯が、当事者としての思い出話も交えて語られた。

守矢さんは茅野市で発掘された縄文のビーナスと仮面の女神について、「地域のアイコンとしてパワーがある」とし、「縄文文化を育んできた八ヶ岳の台地の大切さを知るきっかけを彼女たちが与えてくれた」との見方を示した。原田さんも「土偶はデザインとして分かりやすく、われわれの祖先が創造したのだから親近感を得やすい」とする一方、茅野市の土偶と青森県の遮光器土偶との知名度の差を指摘して、「縄文中期の土偶をまだまだ推さなければいけない」と強調した。